様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月１３日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号： 20520596
研究課題名（和文）『郷土研究』時代における柳田国男の地方研究者の組織化

研究課題名（英文）Organization of Yanaghita Kunio's Folk Study: with special references to "Hometown Studies" 1910-1918

研究代表者
鶴見　太郎（TSURUMI TARO）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80288696

研究成果の概要（和文）：
組織面から見た時、柳田国男の民俗学はしばしば、地方の郷土史家を従属的に扱い、そこから民俗資料を吸収して、独占的にそれらを分析する構造を持っていたと指摘を受けることが多い。しかしながら、同時代の資料、特に『郷土研究』並びに「橋浦泰雄関係文書」などを子細に、かつ長期的な視野のもとで検証すれば、柳田の研究体制とは、その土地々々に自生する郷土研究会の特質を尊重し、全国組織という体裁をとったとしても、それは在来の研究者・研究会を横から繋ぐ、という様式を旨とするものであり、必ずしもトップダウン型の組織運営が目指されたとは言えない。また、大正中期に『郷土研究』に投稿し、柳田と接触を持った郷土史家は、その後、継続的に柳田の主催する郷土・民俗学に関わる雑誌に投稿しており、すすんで長期にわたって柳田と交流を保とうとしたことが分かる。
『郷土研究』とほぼ並行して運営された民俗談話会「郷土会」のメンバーが共通して国家主導のもとで郷土を捉えようとする地方改良運動に強い批判を抱いていたことを確認すれば、実証と経験的思考を徹底する柳田民俗学は、その特色を組織の域にまで拡大して援用し、その効果を挙げたといえよう。

研究成果の概要（英文）：
What I shall discuss here concerns a certain venture organized in Taisho period with folk culture scholars Kunio Yanaghita and their ethnographic studies at its core. Specifically, I would like to review in greater depth what the individuals involved had in common ideologically and what forms of organizing are revealed by looking closely at the interactions and exchanges they incrementally built upon during this period. While imperfect aspects to the Yanaghita's method in "Hometown Studies" are present, it did preserve within itself an arena where achieving ideologies based on experience was made possible by the linking together of numerous figures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　史学・日本史

キーワード：　『郷土研究』　新渡戸稲造　柳田国男　牧口常三郎　郷土　郷土会

１．研究開始当初の背景

日露戦争後の国内政治は新たな国民統合理念の模索と、その具体策としての地方改良運動に代表される地方制度再編の時代である。その内実は部落の共有林野の統合、およびそれに伴う神社の整理に始まり、青年会、産業組合の育成、町村是作成の奨励など、多岐にわたっていた。いわば、国家による郷土統制が明確になり始めた時期でもある。

『郷土研究』の創刊（１９１３年　休刊は１９１７年）は、まさにこうした現象が定着していた時期に符合していた。

同誌は、全国的という意味において、柳田国男がはじめて自身の民俗学を地方に割拠した郷土史家に向けて発信し、組織化をはかった雑誌として捉えられている。

その一方で、当時貴族院書記官長の職にあった柳田国男の編集方針は、一面において官僚的である、という批判が研究史上、展開されてきた。民俗採集の成果を地方から吸収して、その分析は自分の手で行う「一将功成万骨枯」という位置づけはこの時点で既にその兆しがあったとされる。

本研究は、こうした同誌、あるいは柳田民俗学の体質について、大正期の郷土史家をめぐる基礎資料を参照することで、一定の反駁を試みるものである。

２．研究の目的

本研究は、大正期から柳田の許で民俗学研究に従事し、郷土研究の組織基盤の育成に多大な貢献をした橋浦泰雄の残した資料を骨子として、『郷土研究』において柳田が取り組んだ民俗学の全国組織化が、その土地々々の既存の郷土研究者・研究会の在り方を尊重し、目指す組織体はそれらを横から繋ぐ柔軟なものであったことを検証する。

さらにこれに補足して、『郷土研究』とほぼ並行して柳田が幹事をつとめた郷土談話会「郷土会」に集ったメンバー、新渡戸稲造、牧口常三郎、石黒忠篤らの言説を資料的に再構成することで、そこに展開された郷土像が、明治末の地方改良運動によって把握された行政単位としての郷土とは異なる、主体的に自生する郷土像であった点を析出し、柳田もまた、その共通理解のもとで、自身の民俗学を模索していた点を検討する。

３．研究の方法

「橋浦泰雄関係文書」を基礎資料にしながら、特に橋浦宛ての書簡・日記などに登場する郷土史家と、『郷土研究』に投稿し、購読者として名前を記載された人物との相関関係を調べることで、大正期における柳田民俗学のネットワーク形成を検証した。「橋浦泰雄関係文書」は、大正期から戦後昭和期にかけて、柳田が組織化の対象とした地方の郷土史家がほぼ、網羅されており、当該の事項を調べる上で、貴重かつきわめて信頼性の高い資料といえる。

まず第１段階として、「橋浦泰雄関係文書」の中から、書簡を中心に、まとまって橋浦と交流のあった郷土史家を十数名抽出し、その書簡をスキャンして内容を精査する。

第２段階として『郷土研究』のバックナンバーから同誌に投稿した郷土史家、ないし購読者であった郷土史家を割り出し、「橋浦泰雄関係文書」所収の書簡における郷土史家と照合させる。第３段階として第２段階で一致した郷土史家の資料を所蔵している場所へ赴き、柳田･橋浦からの書簡を中心に資料を閲覧し、第１段階での書簡と照合させ、組織化の実態を検証する。

以上の作業と並行して、背景となる同時代の郷土像を把握する上で、『郷土会記録』（１９２５）における記述して、「郷土会」に出席

していたメンバーの郷土像を析出する。

４．研究成果

郷土会で話題に上った事柄は、村の沿革、民間習俗、民政にはじまり、景観論から植民に到るまで多岐にわたった。話のあり方、進め方も、正面から「郷土」という共通の事象を討議することはなく、各自が持ち寄った素材を基に、郷土の諸相を具体例に則して紹介するという形に止められた。その意味で会としては求心力より遠心力の方が強く、論争が行われたという形跡は見あたらない。しかし談話会として極めて快適な空間だったことは多くの会友の回顧録にあらわれているとおりである。

幹事役を務めたのは当時、貴族院書記官長の職にあった柳田国男である。柳田が運営の中枢にあったことから、郷土会は草創期の郷土研究を語る上で、研究史上、しばしば登場してきた。集まった会友たちは多彩で、石黒忠篤、有馬頼寧をはじめとする農政官僚、地理学のパイオニアとなった小田内通敏、農業史の小野武夫、さらには後年創価教育学会を起こす牧口常三郎など、今日から見ても個性豊かなメンバーが揃っていた。常連となった顔ぶれから見れば、この種の談話会としては長く続いたといってよい。

多彩なメンバーをまとめた共通の意識とは何だったか。定まった見方となっているのは、日露戦争後の平田東助内相期における地方改良運動への批判があった点である（芳賀登「柳田国男研究における『地方学』の構想」（『季刊　柳田国男研究』一九七三年春）。これに遅れてあらわれた評価として、強調されたのが郷土会の「サロン」としての有効性である。メンバー相互の個性・意見の相違から生じやすい軋轢を、共通の主題に関心のある人々の自由な討論の場として継続させたところに、パトロンの新渡戸の手腕が十二分に発揮されたと位置づけられる（山下紘一郎の「『郷土會』の人びと」（『フォクロア』一九七七年七・九月号、一九七八年一月号）。

以上を踏まえる時、郷土会に集まった主なメンバーは、「郷土」に関してどのような把握をしていたのかがひとつの重要な焦点となる。郷土会の成立の過程と、主だったメンバーの郷土をめぐる思考を跡づけることを通じて、そこに出席した群像の抱いた「郷土」意識が同時代とどのように対したのかを描くことが眼目となる。先回りしていえば、その作業を通じて近代日本において、「郷土」とはあきらかに幾つかの異なる眼差しのもとに複数の起源を持ち、明治末から大正の一時期、郷土会の中で互いに均衡を保ちつつ、やがてそれぞれの道へと分かれていった。

郷土を小学校児童に対するひとつの教育の場として捉え、「直観科」創設への道を開いた牧口、当時の新興住宅地であっても、そこで生まれた当人にとって、それは郷土に近い要素を秘めていると想定した有馬頼寧、農政官僚として、実地検分を踏まえた政策を念頭に調査を重ねた石黒忠篤―そこにはそれぞれの射程を異にしながら、郷土から自身の問題意識をまとめようとする眼差しがある。郷土会はそれら複数の思惑による郷土像を緩やかに繋ぐ複合体としての側面を持っているのである。

では、肝心の柳田国男はどうだったのか。

「郷土会」に出席していた当時の柳田にとって緊急の課題は、異なる郷土をひとつの研究組織によって繋ぐことはできるか―であり、それは可能であるというのが柳田の立場だった。『郷土研究』は、その実践にほかならなかった。『郷土研究』に投稿し、柳田と接触を持った郷土史家は、東筑摩郡の胡桃澤勘内をはじめとして、「橋浦泰雄関係文書」で頻繁に橋浦・柳田と書簡のやりとりのあった人物を数多く含んでいることが分かった。彼らはその後も継続的に柳田が主催する『民族』、『民間伝承』の雑誌に関わり、柳田と長期にわたる交流を持った。

雑誌投稿を通して各地の習俗を的確に記録・分類する柳田の手法は、同時に地方の郷土史家たちとの信頼を構築することともなった。柳田民俗学の方法・体系が形成されたのは、大正末に行われた沖縄紀行以後だとされるが、少なくともその組織としての特色は既に、大正期の『郷土研究』に表れていたといえよう。この傾向は、やがて続く昭和期に入って『民間伝承』編集長となった組織者・橋浦泰雄の手腕によって、全国レベルで実践の途に就く。

こうして培われた郷土史家との信頼関係による柳田民俗学のネットワークは、やがて農山漁村更生運動など、国家主導におかれる郷土像が賞揚される昭和期に入って、郷土の自律性を重視する意味において独自の価値を持ち始めるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計２件）
① 鶴見太郎　「思想環境としての郷土研究―橋浦泰雄の民俗調査―」『史林』査読あり　92 巻　2009　161 頁～194 頁
② 鶴見太郎　「方法として見る民俗学者の人生」（小池淳一編『民俗学的想像力』所収）　せりか書房　2009　96 頁～111 頁

〔学会発表〕（計１件）
① 鶴見太郎　「遠野物語の封印」　日本近代文学会秋季大会　2010 年 10 月 25 日　於・三重大学

〔図書〕（計１件）
① 鶴見太郎　角川書店　『柳田国男入門』2008　総頁数 201 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
鶴見　太郎（TSURUMI TARO）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80288696